

近代日本におけるアリババ

杉田英明

(東京大学・総合文化研究科)

本報告では、「アリババと四十人の盗賊」の物語が近代日本へどのような形で移入・紹介され、いかなる受容がなされたかを概観してみたい。主要な移入経路としては、①ヨーロッパ語訳からの翻案・翻訳、②外国語教科書・語学教材、③欧米のアラビアン・ナイト映画、の三つを想定できよう。

①については、1887年の新聞連載「年始芝居 四十の山賊」とその単行本『波斯新説烈女之名譽』を嚆矢とし、初期の翻案・紹介を経て、1900年代の初頭以降、児童向けおよび一般向けに英語原文からの全訳がなされるようになる。②としては、まず1890年の『正則文部省英語讀本』第五巻が全体の半分を「アリババと四十人の盗賊」に宛てた点で重要である。その後、1900年代冒頭から中学校教育用の教科書・副読本として原文の翻刻、対訳、注釈、全訳が次々と登場し始める。アリババの名前と物語とが一般の人々に普及するのは、1910年代以降であろう。また、1890年代からは、サッカーやディケンズ、デュマなどの文学作品の注釈や翻訳においても、アリババへの言及がなされている。

③の経路では、まず1920年のフランス・パテー映画『アリババと四十人の盗賊』が1905年から数年に亘って日本全国を巡回し、この物語を多くの人々に知らせる上で重要な役割を演じた。その後、1935年のイギリス映画『朱金昭』やアメリカ映画『アリババ女の都へ行く』は、榎本健一一座や宝塚歌劇が舞台において模倣作を生み出している。『朱金昭』はまた、批評家・長谷川如是閑に中東世界の新たな胎動を予感させる契機ともなった。他方、戦後の1969年封切のフランス映画『アラブの盗賊』では、批評家・水野春夫がそこにアラブ民族の救世主としてのアリババと、宗教を捨て去る民衆との寓意を見て取っている。アリババ映画は、観客をお伽噺から現実世界へと導く新たな機能も持っていたと言えよう。

最後に、日本からの発信として、大藤信郎の1955年のアニメーション映画『團子兵衛捕物帖・開け一ごまの巻』や、60年代の唐十郎の戯曲『アリババ』および大島渚監督の映画『新宿泥棒日記』にも触れておきたい。